

リサーチ TODAY

2017年4月14日

## 『格差で読む日本経済』、格差が世界を揺るがす時代

専務執行役員 チーフエコノミスト 高田 創

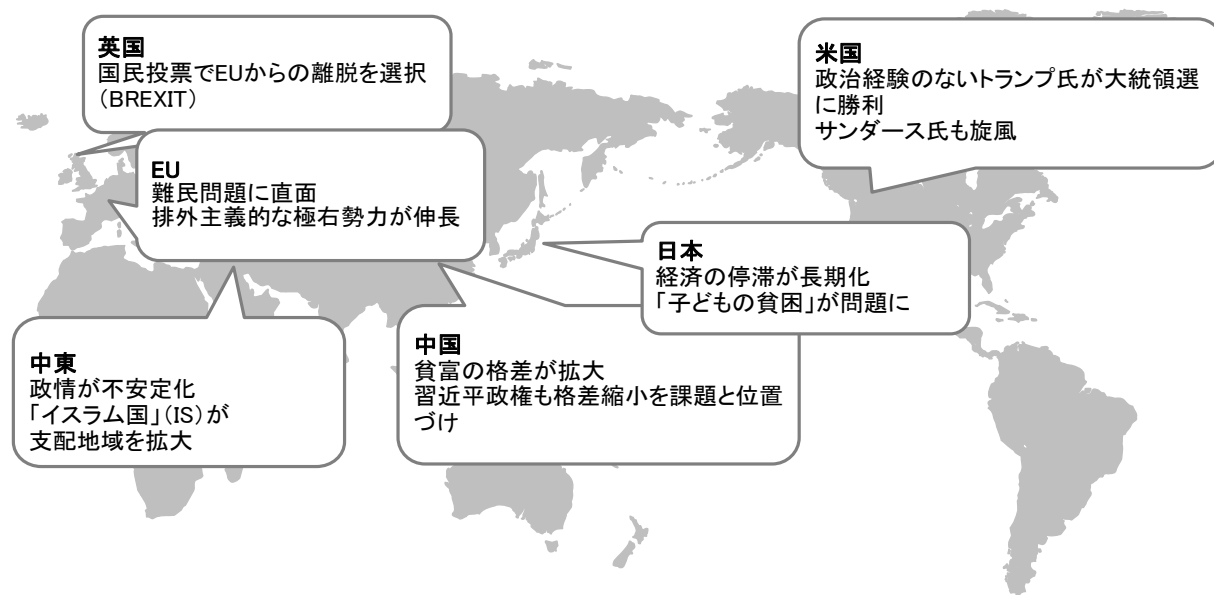
このたび岩波書店より『格差で読む日本経済』を刊行した<sup>1</sup>。英国のEU離脱やトランプ政権の誕生など、世界的に「格差」に対する人々の不満が各国の政治を揺るがすに至っている。日本でも中間層の縮小や貧困の増大が語られるが、その本質を探るためには現状を客観的に把握する必要があると考えたことが出版の理由であった。そのために、できるだけデータを駆使して、世代間、正規・非正規雇用、地域間、企業間など様々な切り口から日本経済を見ることにした。下記が本書における30のキーワードである。つまり今回は、これらのキーワードを出発点に、できるだけ多様な断面から日本の格差問題を浮き彫りにしようと考えた。

## ■ 図表：30のキーワード

包括的成長、ベーシックインカム、ジニ係数、トマ・ピケティ、資本所得シェア、相対的貧困率、等価可処分所得、再分配所得、生活保護、貯蓄格差、非正社員、低年金、世代会計、地域間格差、設備投資の逆転現象、格差感、一億総中流、富裕層、就職氷河期、子どもの貧困、ジョブカフェ、わかものハローワーク、最低賃金、同一労働同一賃金、103万円の壁・130万円の壁、最高所得税率、相続税・贈与税、児童扶養手当、給付型奨学金、トリクルダウン

下記の図表は世界各地の不安定化を「格差」の観点から見たものだ。昨今の地政学的な問題は、世界的な格差問題が大きな底流にあり、それが世界を揺り動かした結果とも言える。

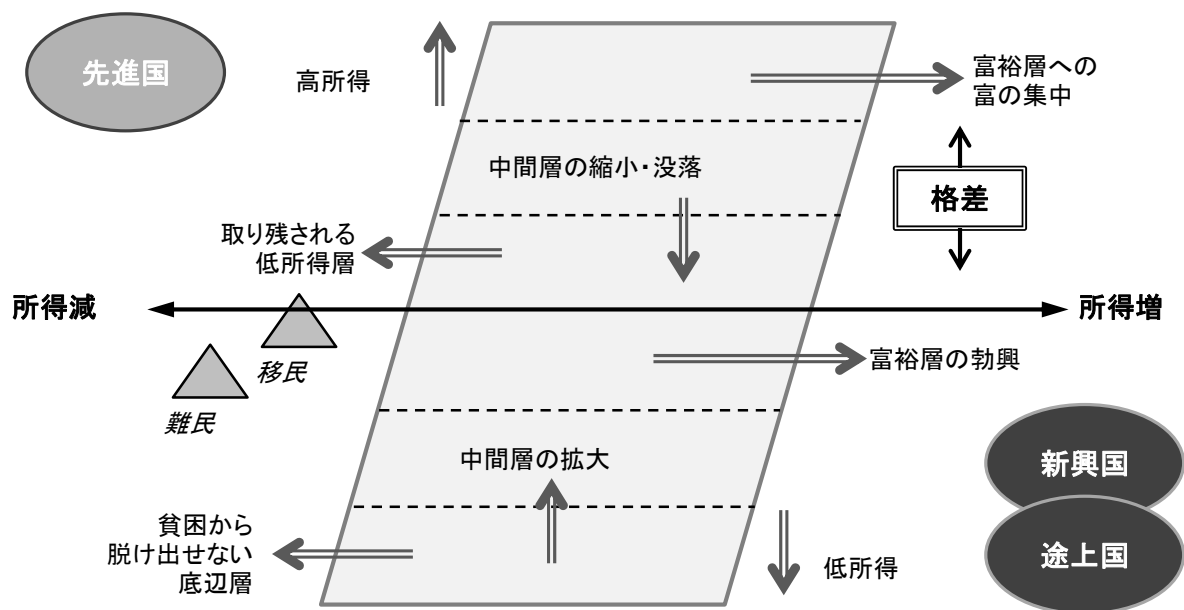
## ■ 図表：世界各地の不安定化



(資料) みずほ総合研究所作成

経済のグローバル化や新興国の台頭のなかで、所得や資産の偏在が進行した。先進国では、一握りの富裕層に富が集中する一方で中間層は縮小し、取り残される低所得層が増加した。新興国では経済成長から富裕層が勃興したり中間層が拡大するも、貧困から抜け出せないより多くの層が底辺を構成する。次の図表は以上の格差拡大を示したもので、先述の政治的イベントもこうした土壌から生じたものだ。それだけに、昨今、「包摂的成長」として広く恩恵がいきわたるような持続的な成長に注目が集まっている。

### ■図表: 先進国と新興国の格差拡大



(資料) みずほ総合研究所作成

格差を巡っては、一般的な見方や通説とされる理解と、データ等から示される実態に相違やかい離がみられる。下記の8事例は、本書で示した通説と実態が異なる典型的な例である。最近の格差に関する議論に対し、一般的な通説・常識とは一線を画して実相を掴む必要があるとみずほ総合研究所は考えている。本書を通じて少しでも日本における格差に関する議論がデータに基づいて理性的に進められるようになればと考えている。

### ■図表: 通説とは異なる論点

- ①日本の格差は欧米のような富の集中でなく所得水準の低下や貧困
- ②格差を巡る議論は不況期より、むしろ景気拡大期に起きやすい
- ③アベノミクスにより格差が拡大したという見方があるが、指標では格差は拡大していない
- ④格差拡大の要因として高齢化が指摘されるが、現役世代でも格差が広がる趨勢が見られる
- ⑤日本は子供にとって平等な教育環境があると見られていたが、親の経済力が子供の教育格差に結び付きやすい
- ⑥子供の貧困問題は生活水準の問題と思われやすいが、子供の将来への希望の喪失につながる事が問題
- ⑦大都市優位・地方苦境とされやすいが、実際には大都市圏なか、地方圏のなかでもばらつきがある
- ⑧中小企業の窮状に目が向かいやすいが、最近の設備投資では中小企業が大企業を上回る逆転現象が見られる

(資料) みずほ総合研究所作成

1 『データブック 格差で読む日本経済』(みずほ総合研究所編 岩波書店 2017年3月)  
<https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/book/170328.html>

当レポートは情報提供のみを目的として作成されたものであり、商品の勧誘を目的としたものではありません。本資料は、当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成されておりますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。また、本資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。